

# 方丈新聞

発行 都学園高校  
方丈新聞社 佳雅泰悟  
三宅里美 千健  
山田原 健  
柳澤

# 城東高校で三校合同授業

## 授業のねらいを生徒自ら考える

今回、「『うららでせつない』物語の読み」に続いて、三校合同で「なぜこの授業を？」という単元に取り組んだ。授業の概要は、奈良女子大学付属中等教育学校・京都学園高校・岡山城東高校の三校が、それぞれ同じ教材を用いて授業を展開し、その授業の様子を撮影して、配信し合うことで、授業の狙いや先生の意図を考えると共に深く教材を読み解いていくというものだ。

今回用いた教材は、『神様』『神様2011』と『平家物語』の「祇園精舎」「藤戸」の四つだ。我が校では四人一組でグループを作り、グループディスカッションをしつつ学習を進めていった。送られてきた動画から、奈良女子大学付属中等教育学校、京都学園高校それぞれの授業の様子が窺えた。三校の授業には、同じようにグループを作り話し合うことで理解を深めていくような様子



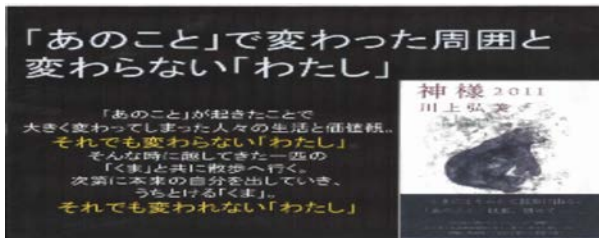
発表に向けて話し合う奈良と京都の生徒

が見えたり、前に出て自分の考えについて発表し、それを皆で討議するような様子があったりした。動画では、自校で話し合った際には出てこなかった意見や考えもあり別の視点から見るとということができ、さらに考えを深めることができた。

これらの授業を通して、広い視野を持ち全体を見る能力や、周囲と協力する協調性、そして自らの意見を進んで発表する積極性が養われたと言える。生徒に今回の三校合同授業についての感想を聞いてみた。「同じ教材を使っていたが、学校によって考え方が違ったので更に考えを深めることができた。」「三校合同の授業をしてみて、他の学校は話し合いの時間が長く自分で考えを掘り下げることで考えていたのだから、学校によって考え方が違ったので新鮮だった。」「ジグソー法を使った

り、グループ発表をしたり、各校の活動が異なっていた。伝わり方も違ってくるので面白かった。」などが挙げられた。生徒の感想からも三校合同授業を行ったことで他校の様子からいい刺激を受けていることが分かった。

やはり一つのクラスや学校などの小さなグループ内で話すのと、他校の意見も聞くのでは、理解の深さが違うのではないだろうか。今回の学習を通して、生徒一人一人がそれぞれに思うことがあったようだ。またこのような機会を大事にしていくことで更に生徒の成長が見込めるだろう。



## 鴨長明の一声

「無常」。この言葉の意味についてはおそらくほとんどの人々が学校の授業を通して習っていることだろうと思う。しかしその授業を教える「先生の意図」を考えながら授業に臨んだ生徒はそうそういないだろう。

そんな中、学校活動の一環として行われたものが「岡山城東高校」、「京都学園高校」、「奈良女子大学付属中等教育学校」3校による「二十一世紀型スキルを磨く―地域を超えて新聞づくり―」である。「二十一世紀型スキル」とは、ざっくりこれか

今回の冒頭に挙げた「無常」がテーマとして取り上げられたが、一つのテーマと言ってもそれは同じ授業を行うという意味ではない。どんなものを取り上げるにせよ、その結論と言うゴールへの道は決して一つとは限らないからだ。例えば京都学園高校は、

### 意義深い発想の転換だ

「どうして現代文の時間に古文の勉強をするのか。」「どうして今まで名前も知らなかった他府県の学校と連携するのか。」「今回の三校連携プロジェクトが始まったとき、生徒達はこのような疑問を持っていたという。

現代文の時間に『平家物語』の勉強をする。これは今までにない新しい動きだ。普段、教科「国語」では、現代文、古典とそれぞれ科目が異なる。指導者も異なるのが通例だ。今回のプロジェクトでは、大きな発想の転換があった。『神様』『神様2011』『祇園精舎』『藤戸』の四教材の勉強を終え、生徒達は気づいた。そこには『不可抗力な運命』を通じて、それを生きる『人間の弱さ・強さ』という共通点があったのだ。それを「文学」は伝える。そ

海外の方と日本人の「無常」に関する感覚の違いや日本の「桜」に関する歌から無常の意味を導きだそうとしていたが、岡山城東高校は「神様」という文学作品とおして、そして奈良女子大学付属は現代と昔の日本人の無常の感覚について考えた。

今回、「無常」というテーマを実際生徒たちが行った流れを説明すると、まず生徒が各学校の先生方の方で考えた道標を教わる。もしくはグループワークなどで考える。そしてテーマについての予測や結論がでたところで、このプロジェクト最大の特徴である「動画サイトにアップされた他校の様子や報告を見る」ということをする。そして各々の授業の相違点や類似点を探るのである。ではなぜこのように授業の見比のようなものをするかの必要性だが、決して授業の優劣をきめようということではない。

最後になるが、これから先グローバル化が進行するにあたって、自分で考えて行動することが出来る「二十一世紀型スキル」を持つ若者が必要になる場面が増えてくるだろうと思う。今はまだ何もできないかも知れないが、今から「今」を少しずつでも変えていけば「未来」を変えられる大きな力になると信じている。その「未来」を背負って立つのは自分たちなのだから。

れこそが「文学の魅力」なのである。その共通点を示すために、現代文の授業時間に『平家物語』を学ぶ必要があったのだ。このような発想の転換は、「文学」を深く読み解くのにとても有効だと言える。また、三校連携プロジェクトも新しい試みだ。お互いの授業を動画で観て、何を勉強しているのかを知るプロジェクトである。今までそのような授業を受けたことがない人が大半だっただろう。このプロジェクトの目的や先生の意図は、最後まで生徒達に明らかにされていらないが、生徒の一人は「授業全体を俯瞰することだっと思う」と話す。実際、自分達が学んでいる教材だけでなく、他校の教材や違う考えを持っている他校の意見も吸収しながら、それらと比較することで、自校の授業のねらいに迫り着くことができたという。

現代は時代の転換期である。この転換期に、学習にこのような発想の転換を加えていくのはとても良いことだ。今後もどんどんこのような意義のある発想の転換をするべきだ。